

パネルディスカッション
「多様な言語的文化的背景をもつ子どもの10年を振り返る」『Minami こども教室』の10年
～地域で外国につながる子どもたちの支援が求められている現状～

山崎一人 (Minami こども教室)

1. Minami こども教室の概要と設立の背景

Minami こども教室は、大阪市中央区に在住の外国につながりをもつ子どもたちを対象とした夜間の学習支援等を実施するボランティア団体である。この「教室」は、大阪でも最大の歓楽街ミナミの一角の外国人居住者集住地域にある。発足のきっかけは、2012年4月に起きたこの地域で暮らす外国人母子の無理心中事件である。このような事件の再発防止に学校が呼びかけ、支援の必要性について関係者が協議を重ねたが、この事件背景には、外国につながりのある子どもや親に立ちはだかる「ことばの壁・こころの壁・法律制度の壁」の3つの壁があることに気づく。そして、この3つの壁を克服するには、社会の様々なところがつながり支援していくことの重要性を認識し、2013年9月発足するに至った。

発足当時、対象の子どもを小学3年から6年生までに絞ったため10人程度だった。時間も放課後、会場も小学校の会議室からスタートした。しかし、子どもたちの支援は、学習支援だけでなく生活全般に関わる支援が必要であるとの認識から時間帯も夜間(毎火曜日の午後6時から8時)、活動場所も子どもたちの生活圏に近いところ(子ども子育てプラザ：大阪市子育て活動支援事業)で行うようにした。

2. Minami こども教室の初期の支援活動**2.1 「言葉の壁」への支援**

発足当初は、日本語支援というよりも、子どもたちが一番必要としていた「宿題の支援」を中心に子どもたちのニーズに応えるようにした。支援体制としては、一対一の「対話型学習」を基本としていた。「対話型学習」にしていたため、支援活動全般で「日本語指導」を行うことにつながっていた。その後、1時間目を「宿題の支援」2時間目を小学校の「日本語指導」と連携強化を目指し、「てのひら文庫」(文溪堂)や多読ライブラリなど読み物教材を活用した「対話型」指導をMinami こども教室でも導入した。(ミナミファンタイム)

2.2 その他の支援**① 高校受験支援**

発足当初、小学3年生から6年生に対象を絞っていたが、子どもや親からの要望もあり、支援の対象を小学1年生から中学3年生に広げた。特に高校受験の支援を必要とする子どもも多かった。

② 課外活動・勉強会・特別活動(料理活動・遠足・キャンプ・若者のつどい)

多くの子どもたちの食生活が乱れていたために食生活の支援の必要性が考えられた。当時は、「子ども食堂」が、なかったこともあり子どもたちに簡単に調理できる方法を教えようと料理活動を始めた。また、体験活動の必要性から遠足・キャンプ等についても可能な限り実施した。

2.3 コロナ禍の学習支援

コロナ禍、学校の休校が長期化することが考えられたので2020年4月より段階的にオンライン教室を開始した。特に中3生と高校3年生については、週3回、ZOOM、LINEを使って春休みの宿題のサポート、小学生には、5月からオンライン教室を行った。

3. Minami こども教室の今**3.1 子どもたちは・・・**

2012年9月に10人(小10人)から始まったMinami こども教室は、2024年3月登録人数186人(小71人、中53人、高43人、卒業生19)参加者数のべ91人(小56人・中高35人)になった。

3.2 Minami こども教室の現在の支援活動**① 「言葉の壁」への支援**

小学生：一対一の「対話型学習」で個別支援を行っている。

現在も2時間目を小学校の「日本語指導」と連携強化して学習内容を決めている。また、絵本や小学生新聞を用いた対話型の「ミナミファンタイム」を実施している。

中学生：日本語・母語教材や多言語絵本・マンガを教室で使うこともあった。

『みんなの日本語』・『中学生のにはんご』（スリーエーネットワーク）、在日フィリピン児童のための教材）シリーズ『Ang KANJI ay Kaibigan』（東京外国語大学）を主に用いた。その他、Minami こども教室オリジナル教材も活用した12月以降は、金曜日の受験生勉強会と連動して実施した。「夏休みミッション」と題して夏休みの宿題対策を実施した。

② 受験支援

2024年度は、12月から2月にかけて毎週木曜日受験に向けての学習会を開催した。参加生徒は、中3生5名・ダイレクト入試1名が参加した。

内容は、中国語、英語、タガログ語、ネパール語で作成した「問題文のキーワード」を活用した。数学の過去問とMinami こども教室オリジナルの受験対策教材、英語の過去問も活用した。日本語の読み書き、学習言語理解に留意しながら進めた。ダイレクト入試受験者については、連携団体と情報交換しながら学習を進めた。

高校オープンスクール、進路説明会、高校進学ガイダンスなどに同行支援した。

③ 相談事業

こどもの見守り強化事業・外国につながる若者・保護者エンパワーメント事業相談事業・ネグレクト児童及びヤングケアラーの寄り添い事業（行政からの委託事業）など、こどもたちへの虐待などを未然に防止するため地域での協力体制を強化してきた。また、保護者の日常的な困りごとや悩みにすぐに対応するための相談や同行支援などを行った。対面だけでなくSNSや電話での相談等も受け付け、解決につなげていった。

④ 指定法律相談所（大阪弁護士会・法テラス）

2022年より大阪弁護士会の「法律相談所」の指定を受けたことによりセンシティブな内容についての相談にも対応でき、より安心して生活できるような支援につなげた。

⑤ おとなの日本語教室についても開催し、保護者の日本語能力についても意識を高めた。

⑥ フードパントリー（食糧支援）などの生活支援も他のNPOと共に支援を 広がりを見せた。

4. Minami こども教室のこれから

4.1 10年間継続してきたことで得られたもの

10年間、継続して課題解決に向け協議を重ねる中で活動を進めてきた。その結果、①当時小学生だった子どものボランティア登録が見られるようになった。②居場所としての機能の充実が図れた。③ネットワーク力が充実してきた。（地域・学校・家庭をつなぐハブ的な役割を果たせるようになってきた。・他地域に引っ越した子どもの支援を継続して行えるようになった。）④他の支援団体との連携強化ができた。（支援活動の必要性等を発信）⑤卒業生のボランティア登録の増加などに現れた。

4.2 持続可能なMinami こども教室に

Minami こども教室が開設して10年が経過した。「教室」で活動してきた子どもたちは、様々な困難を乗り越え、様々な支援を受けながら自分たちの進路を切り拓いてきた。大阪市の小中学校に編入する子どもたちは、毎年1,000人を超えている。Minami こども教室に登録する子どもも200人に迫ろうとしている。その子どもたちの様々な「違い」をもって自分の進路を切り拓こうとしている。それらの子どもたちには、やはり「3つの壁」が立ちはだかっている。「日本語支援」は、単に日本語支援を行うだけでは、成果を得ることができない。「心の壁」や「法律制度の壁」にも支援の輪を広げ、社会全体で取り組むことが求められている。しかし、Minami こども教室が、これからも持続可能な「教室」として支援活動を続けるためには、①ボランティアの人員不足②新規渡日の子どもへの対応③特別なニーズのあるこどもへの対応④キャリア支援⑤資金の確保⑥連携の強化など課題が山積しているが、足踏當時もそうであったように、様々な方と知恵を出し合い、乗り越えていきたい。

【引用・参考文献】

玉置太郎（2023年）『移民の子どもの隣に座る』朝日新聞出版

金光敏（2019年）『大阪ミナミの子どもたち』彩流社

原めぐみ・甲田菜津美・瀬戸麗（2021年12月）「コロナ禍の外国にルーツのある親子を地域で支える」『月刊福祉12・書籍名』全社協（28～32頁）